

日本型ポスト青年期の流行歌

——「現実」隠蔽システムとしての励まし歌——

吉岡 威史

YOSHIOKA Takeshi

1 はじめに

現在、フリーター・ニートなど、若者の雇用を中心とした問題が指摘されている。これは経済的な側面からだけでなく、さまざまな面から、特に若者のアイデンティティの問題としても考える必要があるだろう。筆者は以前より、流行歌の歌詞を題材に、〈大人〉モデルを見失い、なおかつ〈大人〉をめざす期間としては前後に拡張された若者の問題について議論してきている。

流行歌史を、近代日本の社会意識論として扱ったのが見田宗介（[1967] 1978）であるが、これは、鶴見俊輔・吉本隆明らから村瀬学などに受け継がれる大衆文化論・文芸評論の文脈にも位置づけられる。近年の議論は細分化の傾向にあり、ジェンダー論の文脈でさまざまな議論があるが（ex. 『鳴り響く性』）、文化研究の文脈（ex. 南田勝也）でも成果がでていいる。青年文化論の文脈では、宮台真司や小川博司らのアンケート調査がある。ただ、意外に少ないのが、近年「流行歌」としてすぐにイメージされるもの自体が若者のアイデンティティ（形成の）表現そのものだ、という観点である。本論文では、この観点から「流行歌のポスト青年期化」を取り上げる。

ところで、近年の社会学的なポピュラー音楽研究においては、歌詞を社会現象の鏡としてそのまま考えることは素朴な反映論とされている。それはたとえば、作品の作り手と受け手の間に、マーケティング戦略や受け手の多様な受け取り可能性

をみる必要があるということであり、「鏡」とされた部分は、社会現象を歪めて映していたり、つくりだしさえする「メディア」と考えなければならないという。

現代文化研究の分析モデルについては石田佐恵子（1998）の整理があるが、作り手と受け手の間の「コード化と解説」モデルを経た近年の「文化の環流」モデルは、「表現（テキスト生成）」「（ある個人や受け手集団の）アイデンティティ形成」「生産（コード化）」「消費（解説）」「規則（社会の知識の枠組み）化」という、文化の五つの過程が相互に影響しあい環流していくという前提を立てているという。この五つの過程は、コンテキストによってそれぞれの影響・接合関係が異なるため、さまざまな視点からの文化研究が可能（必要）になる。このモデルに沿って考えるなら、筆者の議論は、作り手のテキスト生成はもちろん、マーケティング戦略（コード化）がおこなわれるさいや、受け手が解説をおこなうさいにもキーとなる定型（ex. 歌詞の「夢」など）の歴史的変化に注目しており、その変化について量的な分析も試みてきた（吉岡 2002）。

さて、簡単にいえば、人々は文化をつくり文化につくられるというのが「文化の環流」モデルである。今回取り上げる「励まし歌」というメディアは、ポスト青年期の若者の登場をめぐって現れたものだが、その流行を通し、その受け手集団のアイデンティティ形成に影響を及ぼしつつ再編成されてきたといえるだろう。その様子を検討する

のがこの論文の課題である。

本稿は、まず2章で「ポスト青年期」問題の成立と特徴についての議論を整理し、3章で、「ポスト青年期」現象とパラレルな関係にある歌詞群を分析することで「励まし歌」という若者の精神構造の象徴を抽出し、さらに4章で、その「励まし歌」が流行すればするほど歌詞から現実感覚が消えていく様子を見ていきたい。

文化・教育等のさまざまな局面で、日本の若者は観念的な「輝かしい未来」に取り囲まれてきた。本稿では最終的に、その「未来」の内面化のプロセスに参加することで流行歌が現実を隠蔽するシステムとなる、という事態をあきらかにする。そうした「規則（社会の知識の枠組み）化」は、個別の作り手の誠意や個性や優劣に、さしあたりかわりなく起こるものである。

2 ポスト青年期の青少年問題

2.1 ユースサービスの現在

筆者は2003～4年度、京都市でユースサービスの仕事を経験した。公共施設としてのユースサービスというと、かつては「勤労青少年ホーム」などの運営をしていたが、いまその施設は「青年の家」を経て「青少年活動センター」などに名称が変わっている。高度経済成長期の「勤労青少年」が農村から仕事を求めて都市部に集まり、中小企業で長時間働き、休みになっても行くところがないという状況に対し、健全な余暇活動の場を提供するという目的から設立されたものが、現在ではフリーター・ニートの増加に対し「ヤングジョブスポット」という就業支援機関を併設するようになってきている。

若者支援のプログラムにもやはりすたりがあり、学校周辺の問題にかかわるものに代わって、ひきこもり問題やセクシャルヘルス、就業にまつわる問題が取り上げられる機会が増えている。ま

た、地域共同体的なぬくもりを提供する場から、若者の文化活動をサポートする機能や、社会との関わりへの自発性を失いがちな若者について考察したり、具体的に就職活動をサポートするという機能を志向してきている。

こうした動きは、社会学の言葉では中間集団の機能の変化ということになるだろう。地方から出てきた「勤労青少年」が余暇活動をおこなったり、「青年の家」といった地域共同体的な集いをもつことが必要とされた時代は、〈大人〉像に向けて現在のような葛藤が起こることはない。逆に、そうした地域共同体の記憶が薄れた世代の青少年は、都市で、身近なモデルのない近代型〈大人〉像を求めてさまよいはじめることになる。中間集団の媒介機能が薄れたアノミー状態である。1980年代後半から、先進国では、「個人化」「リスク化」といったキーワードのもとに議論がなされているが、理論の世界だけでなく、青少年支援の現場でもその現象は感じられる。

2.2 ライフコース論の必要性

以上に述べた変化は、ライフサイクル論に替わってライフコース論の必要性がいわれるようになった動きとも一致する。共同体のなかで歴史が繰り返すというライフサイクル論の前提に対し、ライフコース論は、歴史的なコンテクストのなかで諸個人の生涯展開を捉えようとする。『現代人のライフコース』（三沢編 1989）によれば、人間は「歴年齢とともに経過する個人的時間、年齢規範で区切られた社会的時間のほかに」「歴史的時間」を生きている。社会変動や価値観の変動、戦争や大恐慌のような歴史的出来事などから構成されるこの歴史的時間は、「個人的時間における発達パターンや社会的時間におけるキャリア・パターンをさまざまな形で」枠づける。ライフコース論が必要になるのは、こうした歴史的時間を考慮に入

れねばならないような、社会変動が激しく、誰もが予測可能な将来像を描けないときといえるだろう。

ライフサイクル論の代表としては、主に1950年代から60年代にかけてE・H・エリクソンが展開したアイデンティティ論があり、そこではライフステージが八段階に分けられ、各々の段階における発達課題が設定されている(Erikson 1968)。近代社会においては、特にこの八段階における最後の三段階である「成人期」のイメージが、〈大人〉モデルとして漠然と流通してきた。この議論は、近代欧米における現実の社会制度からくる、恋愛結婚があり、何人かの子どもを産み育て、宗教的な悟りの境地の老人になり、といったイメージに裏打ちされている。このような制度通りすすめば〈大人〉という社会的承認が得られるというわけだが、こうした議論は現代の社会的文脈の変化によって通用しなくなる。

ただ、この議論によるならば、〈大人〉とは観念的な次元で「なるもの」とされる。そこでは、単純に共同体での役割を遂行するというよりも、そのさいの心理的状态（親密性・劣等感・インテグリティなど）のほうが重視されているからである。こうした〈大人〉像の抽象化・観念化は重要であり、エリクソンの現代に適用できる部分である。すなわち、「青年期」が、〈大人〉をめざす観念の混乱の時期として、人工的に誕生させられているのである。

2.3 「青年期」の人工的な誕生と拡張

Ph. アリエス『〈子供〉の誕生』（1960=1980）などで知られているように、前近代の共同体的な集団生活のなかで老若男女の境界を明確にせずおこなわれていた労働や遊びは、近代の産業化・都市化における専門分化と分業体制の確立などから、世代や性別によって囲い込まれた。その前提か

ら、柳原佳子は以下のように述べる。「一方で、身体的成熟の加速化と活動能力の拡大化という子どもたちの早熟化の進行、しかし他方では、大人と子どもの制度的な力関係の確定と、家庭と学校への隔離期間の延長による子どもたちの遅熟化の取り決めの進展。この矛盾を調整すべく、新たに編み出されたのが『青年期』という概念であった」（三沢編 1989: p64）。すなわち、〈子ども〉という役割が誕生し、ある社会状況においてはかれらが〈大人〉役割にスムーズに移行することが難しいがゆえに、さらに「青年期」が誕生したというわけである。

「児童期」「思春期」「青年期」といった分類は、精神分析的には第二性徴との関係から捉えられるのであるが、その分類自体は人工的かつ観念的なので、(学校制度などの)社会制度とセットで拡張されてしまうことになる。そうすると、ゴールとしての〈大人〉像が観念として肥大していくことにつながる。

たとえば、竹田青嗣（[1983] 1995）は、池田浩士『教養小説の崩壊』を引きながら、エリクソンによる性体制の段階発展的な考え方には、個人と社会との調和を前提として成立する「教養小説的視線」が混入していると指摘している。すなわち、個人の性体制が正常な発達に失敗すると「固着」「退行」が起こるとフロイトは主張するが、エリクソンは、それと同じように、自我が正常な発達に失敗すると、社会の歴史目標ではなく「小集団に自閉」してしまう（「病い」である）という。この理論の原型は、西洋の教養小説の伝統としての、「危機を克服して自己確認・自己実現にいたる」近代的自我の物語であろう。しかし、社会が構造自体として内包する個と社会の関係失調を、個の「病い」とみなすわけにはいかないと竹田は主張する。だから竹田は、「在日」文学のなかのパターンとして、李恢成の青春小説の主人公

が自らのアイデンティティ混乱を「未熟ゆえの過ち」という物語としてふりかえる様子にはなく、金鶴泳作品の「どもる」資質をもった主人公が「〈父〉〈家〉〈歴史〉〈民族〉との和解」といった物語から拒否され続ける様子にこそ、作家の現実感覚をみる。

人工的に編み出された「青年期」における葛藤もまた、抽象的な大人（成人期）イメージを掲げてしまうのだが、それは、経済状況の変動などによって社会との「関係失調」に陥る危険性を内包している（ex. 現代日本の「教養小説」たるNHK「プロジェクト X」ふうに企業内で危機を克服して自己実現をはかろうにも、就職先も買い手も痩せ細っている）。「青年期」の問題は、多様なライフコースを想定して、ゴールを規定せずに考えていくほうが現実的であろう。

2.4 新しいモラトリアム～ポスト青年期

芹沢俊介（2002）は、日本の若者のひきこもり現象を、治療的な観点ではなく、ライフコース論ふうにつまねおそうと試みている。芹沢によると、現在の青年期は（エリクソンが考えるような）成人期への移行期ではなくなっており、モラトリアム（猶予期間）としての青年期の内実は学校の課題が膨れあがったことにより空洞化している。それゆえ芹沢は、ひきこもりに、「モラトリアムを自力でつくりだそうとしている」という評価を与える。

この評価とは別に、青年期と成人期の境界線がなくなっていることはしばしば指摘される。この「半分青年で半分大人」の時期は、イギリスの社会学者ジル・ジョーンズら（1992=2002）によると、ドイツの Zinnekar（1981）、フランスの Galland（1990）・Gaiser（1991）といった研究者が、「ポスト青年期（脱青春期）post-adolescence」という新しいライフステージとして記述していると

いう。こうしたラベルづけに対してジョーンズらは慎重な姿勢をしめしているが、やはり、「青年期という概念は定義と再定義のプロセス」であるということで、身体的年齢と「青年期」「成人期」という概念との結びつきは比較的薄いと考えている。

これらの議論は、先進国における1970年代以降の低成長期に、消費・生活は一人前なのに収入は半人前、という若者が登場したことが背景にある。そもそもエリクソンの定義による青年期は、12～18歳頃を標準的なものとして想定しているから、現在の「自立しない若者」のイメージよりも随分低く、そぐわないものになっている。初期の指摘としては、アメリカの心理学者ケネス・ケニストン（1968=1973）が、脱工業社会において adolescence と adulthood の間の youth という段階が現れはじめたと述べ、young radical と彼が呼ぶ若者たちの未熟な探究精神に期待をよせていた。ケニストンは、高卒後30歳ぐらいまでを youth と考えている。

小此木啓吾も、はやくからモラトリアム期の登場と変容に注目していた。小此木が青年層を「モラトリアム人間」という言葉ではじめて呼んだのは1971年で、その後1977年になると、この「モラトリアム人間」の心理構造は、現代社会のあらゆる年代・階層の共有する「社会的性格」（フロム）になったと主張した（小此木 [1977] 1981）。また、そのモラトリアムの内実が新しくなったと小此木は考える。

- i 半人前意識から全能感へ
- ii 禁欲から解放へ
- iii 修業感覚から遊び感覚へ
- iv 同一化（継承者）から隔たり（局外者）へ
- v 自己直視から自我分裂へ
- vi 自立への渴望から無意欲・しらけへ

すなわち、青年期的な課題達成のイメージか

ら、「とりあえず」的イメージへの移行が指摘され、また、依存状態の自覚が薄れ、空想のなかでの自信過剰が肥大していることも指摘されている。また、こうした変化が起こったことの社会的背景としては、①産業社会化の急速な進展 ②高学歴社会化 ③情報・消費社会化、といったところがあげられている。新しいものが続々と登場し、古いものの継承を打ち消していく世界では、柔軟な中間層（準備中の層）の地位が向上する。また、生産したものは消費されなければ意味がないので、消費者・お客様としてのモラトリアム層の地位は向上することとなる。

「空洞化」「ラディカル」「お客様化」「アパシー」（笠原嘉）など、その中身については種々の議論があるが、ひとついえるのは、1970年前後に注目されだしたモラトリアム期間が、70年代末には、一過性のものでなく独立した存在感をもつようになったということであろう。

2.5 パラサイト・シングル論、社会的弱者論

1997年に山田昌弘は、「学卒後」「二〇・三〇代にもなっても」「基礎的生活条件を親に依存している」「親と同居している」「(女性が圧倒的に多い)独身男女」を批判的に「パラサイト・シングル」と名づけた(山田 1999 a)。総理府の国民生活に関する意識調査「暮らしに対する満足感」(1997)をみると、20代女性が77.7パーセント「満足している」「まあ満足している」と述べている。一方、現在の日本の家族構造からは主力の稼ぎ手といえる40代男性の満足度がもっとも低く58.0パーセントとなっている。大人の生産者よりもモラトリアムのお客様が優位に立つ消費社会が実現しているとわかる。またその大きな原因として山田は、日本の家族関係に特有の依存性をみている。

この書物の出版後、山田は、社会心理学者ラン

ドルフ・ネッセの「希望は、努力が報われるという見通しがあるときに生じる」というフレーズを手がかりに、モラトリアムの「夢」と「希望」の差異を強調するようになる。「夢見る使い捨て労働力としてのフリーター」という論文のなかでは、「夢と希望は異なる」「希望という感情は、努力が報われるという確信によって生じる」「ここで重要なのは、希望は、好きなことをやっているかどうかとは無関係であるということだ」と述べる。その後、『希望格差社会』(2004 a)において、このフリーターらの「夢」の不可能性(＝「リスク化」)が社会に認知され、(努力が報われない)階層分化(＝「二極化」)がはっきりしはじめたと論じている。山田の一連の議論は、ポスト青年期のモラトリアム特性を、まず「遊び感覚・消費者」の依存性にアクセントをおいて捉えたものの、「一九九八年問題」として論じられる)社会の急速なリスク化により、「自我分裂・無意欲」として捉えることにアクセントが移行している。

山田の共同研究者だった宮本みち子は、2002年にまとめられた『若者が《社会的弱者》に転落する』で、「ポスト青年期」という言葉を積極的に使用し、現在の若者を「自立からの疎外」として論じ、〈大人〉の定義の変化を明確にした。宮本によれば、卒業・就職・結婚といったイベントを通過する(＝共同体の一員になる)ことに替わるその新しい定義は、ジル・ジョーンズやクレア・ウォーレスがいう「シティズンシップの権利を獲得するプロセス」ということになる。つまり、ポスト青年期の課題は、選挙権・労働の諸権利・社会保障の諸権利などを獲得、行使し、社会のメンバーとしての責任を果たせるようになることだという。この定義だと、近代後半期におけるライフコースの多様化を受け入れる柔軟性がある。これには、決められたコースを行くのではない、リスクをとまなう「自己選択・自己責任」がルール

となる社会への移行が必要となる。この定義を用いることで、さまざまな批判・提案が示されている。たとえば、現在のフリーターの増加は、いっけん「選択の自由」の象徴のようでありながら、年功序列などで若年労働者に労働市場を開いていないことの結果であり、若者は経済的に自分に責任をもつ権利がある、という認識が社会の側に不十分なためだという。玄田有史ら(2004)の「ニート」論もまた、幼少時からの職業にかかわるトレーニング不足を問題としている。

1990年代後半からふたたび盛り上がっている青少年問題についての議論は、70年代のモラトリアム論のバリエーションであるが、「猶予期間」以後の〈大人〉像を失い、社会構造を問い直す視点が多くなっている。

3 流行歌のなかのポスト青年期

3.1 流行歌世界の「ライフコース論」化

さて、2章でまとめてきた「青年期」「ポスト青年期」の形成・展開は、流行歌の世界とどのような関係をもつのか。

戦後日本の流行歌史において、転回点といえるのは1960年代半ばである。これは、日本型ポスト青年期の内実たる新しいモラトリアムがその芽をみせはじめた時期と一致している。小川博司(1998)によると、この時期以降、日本のポピュラー音楽の世界は大きく様変わりし、たとえば、流行歌は国民の幅広い層に支持されている、という、歌詞＝社会意識といった分析の前提が覆されるようになった。

その原因としては、まず、テレビメディアと流行歌が連動しはじめたことによって、「それについていける若年齢層／なつメロや演歌にとびついた中高年齢層」が分化しはじめたということ、また、特にアメリカからの影響によってフォーク、ロックを中心に聴く層がでてきた、といった事情

がある。そのことによって、流行歌が、「演歌／テレビに親和的な歌謡曲／洋楽志向のフォーク・ロック」の三つに分化したということがあげられている。こうした世代による三つの分断はおおまかにいえば今も続いているだろうが、この分化現象は、当時の都市化・メディア社会化のなかで、ライフサイクル的人生観を覆し、ライフコース論的視点への転換を迫るような状況と連動している。

たとえば、演歌の定型は以下のようなものである。

白樺 青空 南風／こぶし咲くあの丘／北国の
ああ北国の春／季節が都会では わから
ないだろと／届いたおふくろの 小さな包み
／あの故郷へ 帰ろかな 帰ろかな

(千昌夫『北国の春』1977)

ここではいつの世も変わらないはずの絆が前提になっており、このライフサイクルイメージを生み出す〈故郷〉は、都市化がすすむほど、表現の定型化がすすむほど、現実世界に「帰る場所」がなくなってくる。いわゆる「演歌」は「似たようなものばかりで低俗」といった大衆文化としてみられやすいが、それはその成立が、「都市化に適應できなかった者の懐古・情緒的定型」を繰り返し味わいたいというモチーフに発していることに一因があるかもしれない。

戦後の日本型「青年期」の流行歌の成立については、これだけでも大きなテーマであるが、さしあたり1963年発売の二曲にその結実点をみることができる。

いつもこころに 二人の胸に／夢を飾ろう
きれいな夢を／昨日習ったノートを君に 貸
してあげようやさしい君に／つらい日もある

泣きたいことも／あるさそれでも 励まし
あつて／遅くなるから さよならしよう／丘
の木立に 夕陽が紅い (三田明『美しい十代』)
赤い夕陽が 校舎をそめて ニレの木陰に
弾む声／泣いた日もある 怨んだことも／残
り少ない日数を胸に 夢がはばたく 遠い空
(舟木一夫『高校三年生』)

ここで、「夢」という言葉には未来への「理想」が込められ、夕陽が暮れてゆくこの場所から抜け出して自己実現をはかりたいというモチーフが登場している。このうち舟木一夫はテレビ映りのよい「御三家」として知られている。流行歌というものの自体が、おそらくこの時期以降青年の専売特許となっていたのだが、その根底には、このテレビメディアを媒介する「都市化・情報化の流行に乗り遅れない、夢＝理想」の成立がある。

ただし、この時期がその後の「ポスト青年期」的「夢＝理想」と一線を画しているのは、「習ったノート」「門限」などの社会的規範が信じられ守られていることと、そのことによって学校制度からの卒業に意味が与えられているということである。すなわち、青年期の試行錯誤・課題達成的側面が強調され、かつ、それが循環していくと信じられているのが特徴的である。だから、これらの曲では、ライフコースをそれぞれ選んでいく個人たちが、巡り巡ってゆくライフサイクル的世界での連帯を確かめあう叙情(＝夕陽)にこそアクセントがある。

その後、若者層の「テレビ連動派」は「ポスト青年期の消費的・享乐的な側面」に、「欧米志向の本格派」は「青年期の課題達成という側面」にアクセントをおいた表現をおこないながら、都市での新しいライフコースの課題に直面していくことになる。

ところで、60年代後半以降の流行歌世界の

「ポスト青年期」化には、テレビメディアの浸透(60～71年のテレビ放送のカラー化)や都市化といった理由以外に、大学進学率の上昇という原因があげられる。いわゆるカレッジ・ソングといわれる自作のフォークソング群の存在である。このうち、ポスト青年期の消費・享乐的側面を代表するものとして、ザ・フォーク・クルセダースの『帰ってきたヨッパライ』(1967)をあげることができる。また、青年期の課題達成的側面を引きずりながらもその空虚さに気づきはじめているものとして、「何をさがして 君は行くのか あてもないのに」というブロード・サイド・フォーの『若者たち』(1966)や、吉田拓郎の作品群があげられる。

ただ、重要なのは、若者世代に限定されることなく、流行歌世界全体が、この時期以降ライフコース論的世界を生きはじめるということだ。演歌の大御所である美空ひばりでさえ、『川の流れのように』(1989)では、季節の巡り巡る故郷を出て「夢＝理想」を探して遠くへ流れていく自己イメージを歌うようになる。「ポスト青年期」は、年齢的には18から30代前半を指すだろうが、その(リスクをとまなう)自己選択的志向は、(年齢的に前後に拡張され)流行歌の歌詞全般のテーマとなったのである。

3.2 青年期とポスト青年期の境界線～1972年

さて、青年期の課題達成のモチーフの登場が、ポスト青年期の混乱のなかでどのように受け継がれたかを示すキーワードとなるのが、さきに示唆した「夢」という言葉である。私はかつて「戦後歌謡の定型にみる『現実』感覚の変遷」(2002)において、戦後の流行歌で「夢」という言葉がどういう使われ方をしてきたのか500曲以上を分析した結果、「夢」が「まほろし(虚構)」という意味ではなく「理想」という意味で使用されるのが

完全に定型化したのは、1980年代半ば、特に1990年代初頭からである、という結果を得ている。また、「夢」という言葉の使用率自体が上昇してきたこともわかった。ちなみに、この「夢＝理想」定型と反比例して弱まるのが、60年代には60%の曲に登場した「涙＝未練＝後ろ向きの時間感覚」定型であった（＝演歌的共同体世界の隆盛と衰退）。

バブル経済が崩壊した、社会全体に希望が失われたと思える時期（「虚構の時代」と呼ぶ論者もいる）にこそ「夢＝理想」があかるく歌われた様子、私は、藤井淑禎（2000）の「ふるさとイメージの虚景化」という言葉に倣って、「若者の未来イメージの虚景化」と名づけた。実際の故郷賛美や望郷心を歌ううちに形骸化した、ありもしない「うさぎ追いかの山」が「虚景」だとするならば、「青年期」的な自己実現の欲望を歌ううちに形骸化した、ありもしない美しい未来の自己イメージを語る「夢＝理想」は、「虚想」と呼べるだろう。

1980年代半ば以降の流行歌を単純にみれば、むしろその「青年期」的な、課題達成的「夢＝理想」表現が増えている。しかしながら、山田昌弘が指摘していたように、「夢は希望とは区別される」、すなわち、「理想」であり前向きである「夢」が、その現実性（希望）と切れてしまったとき、日本型ポスト青年期はその内実をあらわしているのだといえる。つまり、「ポスト青年期」表現の特徴は、①新たなモラトリアムとして享樂的である、という前提のもとに、②同時に自己実現・課題達成的気分も強まっているがそれが現実と一致しない、と要約することができる。

では、「青年期」表現としての流行歌と、「ポスト青年期」表現としてのそれとの境界線は、流行歌史のなかで、どのあたりに引くことができるだろうか。しばしば指摘されるのは、1972年に井

上陽水が発表した『傘がない』である。

都会では自殺する若者が増えている 今朝きた新聞の片隅に書いていた／だけでも問題は今日の雨 傘がない／行かなくちゃ 君に逢いに行かなくちゃ 君の町に行かなくちゃ 雨に濡れ／冷たい雨が 今日には心にしみる 君のこと以外は考えられなくなる／それはいいことだろう？

田中康夫は、『『なんとなく、クリスタル』を書いた頃』（1983）のなかで、当時の自分が書きたかったのは、「井上陽水が今の僕にとって一番大事なことは、政治問題や、社会問題ではなくて、デートに行くというのに、雨の中をさして行く傘がないということなんだと、『傘がない』の中で歌っていたように、豊かな日本に育ってきた世代が、気分よく暮らすことを、生活のメジャーにしている現象を描いている小説」（p 230）だったと述べている。「青年期」の課題達成的な側面から、「ポスト青年期」の享樂的・消費的側面への移行を、田中はききとっている。新しい青年文学を切り開いたと評価される、田中ならでの考えだろう。

一方、1970年代がこの曲から始まったと評価する村瀬学（2002）は、この「行かなくちゃ」という言い回しに、「意志の二段構え」をみている。心が、「行く」ことを求めることと、「しなくては」というはずみを求めることの二層になっていることが、断定や意思表明を避ける、独りよがりな情念につながっていくというのだ。だから、「それはいいことだろう？」という奇妙な問いかけが生まれる。村瀬の考えを拡張すると、ライフサイクルの節目において、社会から求められるさまざまな課題（「恋愛」すらも）に対して、確信をもてなくなっている若者の像が浮かび上がる。

確かに、実際のこの歌の暗い響きには、田中の
 というような「政治から消費へ」といった吹っ切れ
 方ではなく、むしろ、「冷たく降りしきる雨」と
 という心象風景のなかを「それでも消費へ向かうこ
 とが必然なのだろう？」と歩いていく感触があ
 る。自我形成にとって一番大事なことは政治や社
 会の問題であるような気もするが、それが探せない
 ことが問題である。だから、翌年発表された
 『夢の中へ』は、すべて疑問形で、「探しものは何
 ですか？ 見つけにくいものですか？ 鞆の中も
 机の中も探したけれど見つからないのに まだ
 まだ探す気ですか？ それより僕と踊りませんか？
 夢の中へ 夢の中へ 行ってみたいと思いま
 せんか？」と歌われているのだろう。

課題達成的な「青年期」から、享乐的な「ポ
 スト青年期」のモラトリアムに、自覚的に入っ
 ていくのが、1970年代前半のこれらの歌だとい
 える。ここで歌われる「夢」が、空虚なあか
 り響きをともしなうことは、井上陽水のアイロ
 ニーであろう。

3.3 「卒業」から「見果てぬ夢」へ～1980年代

その後、「熱い心をしばられて 夢は机で削ら
 れて 卒業式だというけれど 何を卒業するの
 だろう」（『ギザギザハートの子守唄』）とい
 うチェック
 ーズが登場したのは1983年。「あと何度自分
 自身卒業すれば ほんとうの自分に辿りつけ
 るだろう」「夜の校舎窓ガラス壊してまわ
 った」と、現在の共同体が強いる「卒業」に
 意味をみいださない尾崎豊『卒業』は1985
 年。これらの表現は、校内暴力世代のよりど
 ころとなった。「卒業式で泣かないと冷たい
 人と言われそう」という斉藤由貴『卒業』も
 85年であり、歌詞のなかでライフサイク
 ル的「卒業」への意味づけの期待と現実との
 ズレが問題にされたのがこの時期である。

しかしチェックーズも、1986年の『Song for

U.S.A』では、「見えないもの信じられたティ
 ーンネイジのまま約束だよ／大人になってくれ
 と歌う。「ティーンネイジのまま」であるよ
 うな大人とは、この曲の言葉では「見果てぬ
 夢」を追いかけている状態なのだろうが、そ
 れがある種の幼稚さであるとして、それでも
 かまわないというのが、移行期ではなく独立
 した時期として認められる「ポスト青年期」
 的であるのだろう。

その後、消費社会化が進行し、貿易黒字など
 によってバブル経済の絶頂に向かっていく頃、
 ポスト青年期の享楽性を歌いあげたのは、1988
 年に日本レコード大賞・年間ベストセラーを
 獲得した、光 GENJI『パラダイス銀河』で
 ある（作詞は飛鳥涼）。

ようこそここへ 遊ぼうよパラダイス 胸の
 りんごむいて／大人は見えない シャカリキ
 コロンブス 夢の島までは さがせない／空
 をほしがる子供達 さみしそうだねその瞳／
 Ah ついておいで しぼんだままの風船じ
 ゃ 海の広さを計れない／Ah まして夢は
 飛ばせない／銀河行きの ベルが鳴れば 夢
 は止まらない／何処までも

「大人は見えない」というのは、「大人になると
 見えない」という意味なのか「大人は見あた
 らない」という意味なのか、いずれにせよ、「
 夢」は子どもの特権であり、その延長線上に
 あるのが、課題達成的（＝コロンブス）なく
 大人像ではないという感性が登場している。ま
 た、「パラダイス」「空」「銀河」といったよ
 うに、実体がないままに空想的万能感だけを
 喚起する単語が多用されている（こうした感
 性は、80年代に人気絶頂であったマイケル・
 ジャクソンに認めることができる。彼は自宅
 に遊園地をつくりあげ、非成長のシンボル
 であるピーター・パンの像を飾っているの

だから。2003年に話題となった、英国のジャーナリストによるマイケル・ジャクソン批判番組は、こうした非成長の像に関する対立として考える必要もある)。

実は、日本の流行歌の歌詞に自己実現的〈大人〉という概念が登場するのは、佐野元春『ガラスのジェネレーション』(1981)あたりまではほとんどない(それ以前は「男」がこれを代替してきた)。佐野の「つまらない大人にはなりたくない」という青年期的な歌詞には、「さよなら Revolution」「答えはいつもミステリー」と、課題達成の断念も既に取り込まれており、いわば「大人は見えない」モラトリアムの権利化への欲望を表現している。初期の佐野の曲全体にいえることだが、誘惑する街のなかで「わからない」「～になりたくない」と発し続ける居場所の確保自体がひとつのテーマになっている。それが『パラダイス銀河』にまでいたると、モラトリアムは反抗的でなくても可能になっていて、「しゃかりきコンプス」が滑稽なマジメな大人だとさりげなく語られている。

3.4 励まし歌の登場～1980年代後半から90年代

どんなに困難でくじけそうでも 信じることを決してやめないで／もう一度夢見よう／信じることさ 必ず最後に 愛は勝つ

(KAN『愛は勝つ』1990)

自分らしい恋をそう 見つけたの／誰もが探している 幼い日々の落とし物／とりもどせるものならば／自分らしい夢をいま 感じてる (浜田麻里『RETURN TO MYSELF』1989)
少し気が多い私なりに／泣いたり笑ったり／“わたしらしく”あるために くり返した／心はやる この不思議な夜の力を借りて

(Dreams Come True『決戦は金曜日』1992)

『傘がない』で井上陽水は、「それはいいことだろう？」と自分を励ましていたのであるが、その「励まし」は自信のなさの裏返しであった。日本型ポスト青年期という観点から以降の流行歌を分析していくと、「愛」「夢(＝やりたいこと)」「私らしさ」が理想的な状態として想定され、しかし新聞に載っているような社会の情勢とは無関係に、この自信のない状態を鼓舞したいという心象が描かれている。享乐的な街で「見果てぬ夢」をみる居場所を確保した日本の若者たちは、無気力だったわけではなく、むしろ、その気力の行き先が問題となっている。

これらの曲の定型の本質は、あの、「探しものは何ですか？」という『夢の中へ』の構造に集約される。「やりたいこと」をしているから夢(探しもの)の途中であるよりは、「やりたいこと」そのものが「探しもの」なのであるから、うまくみつからない。この、「探しものが探しものである」ような、無限の自由な選択肢の前で不自由になってしまう(金子・大澤 2002)のは、新しいモラトリアムのひとつの特徴である。

香山リカ(1999)は、昨今の「私探し」ブームの根底にあるのは、フロイトのいう自己愛、すなわち、幼児期の「自分はなんでもできる、自分は世界の中心だ」という万能感だと述べている。その自己愛をモデル(原型)にして、その模倣として対象愛に移行するのが〈大人〉ということだとすると、ポスト青年期の問題とは、具体性をともなう対象愛に移行しえず「探しもの」が自己の幼児期に遡り(→浜田「幼い日々の落とし物」)、「鞆の中も机の中も探したけれど見つからないのに まだまだ探す気ですか？」といったものにならざるをえないことだろう。

いつしか、このような原理的空転状態を鼓舞する歌がポスト青年期型歌謡の定型になっていった。これを、村瀬学(2002)の表現を借りて「励

まし歌」と呼ぶことにし、次章では、このポスト青年期的な励まし歌の形成と展開を概観している。

4 励まし歌と焦燥の歌

4.1 バブル経済期までの励まし歌

最初期の励まし歌と思われる井上陽水『傘がない』『夢の中へ』は、アイロニカルなものであり、そのぶん現実との接触感覚が残っている。その次に登場したのは、アメリカ文化と「青春」の刹那を意識した曲である。

銀幕の中 泣き顔の ジェームス・ディーン
のように／今が過去になる前に 俺たち走り
だそう だから／HERO ヒーローになると
き アーハーそれは今

(甲斐バンド『HERO』1978)

若いうちはやりたい事 何でもできるのさ／
ヤングマン 夢があるならば／ヤングマン
とまどう事など／ヤングマン ないはずじゃ
ないか／俺と行こう

(西城秀樹『YOUNG MAN』1979)

ここにはく若いのだから自分たちで何かできるはず」という気持ちがあるが、これは、ライフサイクルとしての「青春」がやってきて去ってゆくものだという「青年期」的確信に支えられている。その「夢」の先にあるのは「アメリカ人(近代人)」なのかもしれない。ただ、このように「アメリカ人」をめざすのは、かれらの親のライフサイクルになかったもので、威勢のいい掛け声の繰り返しは、実は何を探しているのかよくわからないで「とまどう事」があることを打ち消しているようでもある。

励まし歌が次に盛り上がるのは、1985年から86年にかけてである。渡辺美里『My Revolution』・

ハウンドドッグ『ff』など、「日本のロック＝ニューミュージック」と呼ばれてブームになった歌が、「夢を追いかけるなら たやすく泣いちゃだめさ」「激しくたかぶる夢を眠らせるな／あふれる思いをあきらめはしない／愛がすべてさ／今こそ誓うよ」と鼓舞していた。マヌエル・カステルの作成したデータによれば、この時期に資本の国外移動が急激に活発になっている。1984年に国内総生産の25%にすぎなかった資本の国外移動は、1986年には163.7%にのぼっている。この時期の貿易黒字が、バブル経済を生んだ。かつて「アメリカ人」のようであろうとした励まし歌は、こうした未曾有の好景気のなかで勇ましい響きになっている。しかし、これらの歌は、「きっと本当の悲しみなんて 自分ひとりで癒すものさ」とか「おまえの涙も俺を止められない」といったように、歌詞自体は内省的であった。

もう少し時期が経つと、「私たちは今やアメリカを経済的に脅かすほどだ」という、劣等感と優越感の混ざった自意識の肥大(青木 1990)から、「それはいいことだろう?」という内側の声を吟味するにはエネルギーがありあまっているというような曲調が目立つ。

Fly with me, darling 舞い上がる虹の スコール／世界でいちばん大きな太陽 いつまでも夏を 焼きつけて

(プリンセス・プリンセス『世界でいちばん熱い夏』1987)

走る走る 俺たち 流れる汗もそのままに

(爆風スランプ『Runner』1988)

栄光に向かって走る あの列車に乗って行こう／土砂降りの痛みの中を傘もささずに走って行く (ブルー・ハーツ『TRAIN-TRAIN』1988)

4.2 「現実」隠蔽システム・他者依存の励まし歌
こうした〈走る歌〉のアンサーとしてあらわれ

ている励まし歌は、「負けないで もう少し 最後まで走り抜けて／どんなに離れてても 心はそばにいるわ／追いかけて 遙かな夢を／負けないで ほらそこに ゴールは近づいてる」という、ZARDの『負けないで』(1993)が象徴的である。元レースクイーンだったという坂井泉水が書いたこの歌詞は、日本型ポスト青年期がたどった「夢=理想」の、ある一面をあらわしている。それはつまり、自分の具体性のある「夢」ではなく、誰かのそれに抽象的に依存するような形態である。

またこの曲の、「何が起きたって ヘッチャラな顔して／どうにかなるサと おどけてみせるの」という言葉は、社会問題との関わり方の薄さを想像させる。桜井哲夫は『〈自己責任〉とは何か』(1998)のなかで、昨今の日本の「自己責任」という言い方の無責任な使いぶりを指摘し、その例として、自主廃業が決まった山一証券のヒラ社員がテレビのインタビューに答えた「何と言っても十数年前にこの会社を選んだ自分の自己責任もありますから、仕方ないと思います」とのコメントをあげている。このヒラ社員は、自己のライフコース上の(「夢」への途上での)トラブルとして問題を処理しようとしているが、実際はそれは、経営陣や世界経済といった部分での問題である。『負けないで』の歌詞には、「現実」を隠蔽するシステムとして励まし歌が機能する可能性を感じる。

こうした女性歌手(作詞家)の「夢」の扱いは、1987年の岡村孝子『夢をあきらめないで』の「負けないように 悔やまぬように あなたらしく 輝いてね」といった、純粋に他者を励ます歌あたりからだと思われる。この時期にリバイバルし、結婚式定番ソングとなった長渕剛『乾杯』のような、きっぱりと他者の「夢」「愛」を後押しするタイプの歌もまたそうである。だから、純

粋な他者への応援歌というものは、バブル絶頂期に流行を始めるのだといえる。

おそらく、山田昌弘が「パラサイト」と呼ぶ、日本型ポスト青年期の特徴である依存心理の典型が、この時期に登場している。すなわち、国外にわたる資本の圧倒的な移動、海外旅行の活発化などで、身の丈にあった金銭感覚が麻痺し、自己の現実コントロール感覚を失った代償として、他者にそれを求めている。若い女性が、結婚相手に「三高(高収入・高学歴・背が高い)」を求めるといった現象がはっきりあらわれたのはこの頃であろう。コツコツ努力するよりも不労所得で一攫千金、といった世の中の風潮と、近代・戦後に確立されてきた専業主婦役割の取得とが結びついてできたものが、「夢をあきらめないで」といった定型だといえる。

4.3 バブル経済崩壊後の励まし歌

こうした、ある種他者依存的な励まし歌というものは、バブル崩壊の年である1991年に頂点を迎える。前章で紹介した『愛は勝つ』であるとか、大事MANブラザーズ・バンド『それが大事』の「負けない事 投げ出さない事 逃げ出さない事 信じ抜く事 駄目になりそうな時 それが一番大事」といった歌詞やメロディーにおける単純さは、気恥ずかしいほどに定型を守っている。「どんなときも どんなときも 僕が僕らしくあるために『好きなものは好き!』」といえるきもち抱きしめてたい」といった歌詞をもつ、槇原敬之『どんなときも』もこの年である。

これらの曲の単純さが通用した理由は、「高価なニットをあげるより 下手でも手で編んだ方が美しい」(『それが大事』)といった歌詞をみれば納得がいく。バブル経済自体が身に余るもので不安だったのに、その崩壊は、極めて不安なものだったはずだ。そうした自分の努力では触れ得ないよ

うな現実の変化があったとしても、「あなたらしさ」は、単純で安価なものなかに宿っていると、説得するような響きがここにはある。

女性のほうでは、今井美樹『Peace of my Wish』、小泉今日子『あなたに会えてよかった』といった、相変わらず男性の「夢」が叶うように祈るタイプの励まし歌が流行したのがこの年である。1990年代半ばまでの女性歌手のヒット曲で注目すべきは、以下の三つの方向だろう。まず、ZARD『負けないで』のようなステレオタイプを純化・形骸化していく方向。次に、広瀬香美『ロマンスの神様』（1993）の、「性格良ければいい そんなの嘘だと思いませんか？」と、合コンに出かける女性のホンネ。これは、平松愛里『部屋とYシャツと私』（1992）などと同じく、確信犯的な、消費・享乐的な専業主婦への志向である。一方で、岡本真夜『TOMORROW』（1995）は、「涙の数だけ強くなれるよ アスファルトに咲く花のように」「自分をそのまま信じていてね 明日はくるよ どんなときも」と、いわゆる「母性」を引き受ける姿勢をみせている。

おおまかにいって、「勇気」「愛」のようなシンプルな感情が世界を救う、といったたぐいの生真面目な励まし歌を男性が歌っており、女性はアイロニカルな要素も含みつつ〈妻=母〉につながる方向の励まし歌を歌っているというのが、バブル崩壊後数年の特徴であるといえる。

しかし、どんなに「最後に愛は勝つ」といった個人的かつ抽象的な確信を並べても、むしろそれゆえに、これらの歌は、日本におけるポスト青年期型歌謡の完成形態といっているものである。すなわちそれは、「頑張る」のが私ではない他者一般に依存する構造ができあがっているという意味においてである。「私らしくあるように頑張る」といっても、その頑張っている私は、まだ「私未満」ということになるから、この「私未満」とい

う他者一般を励ましてあげる、といった構造もある。

なぜそうなるのかといえば、おそらく「私」自身は、努力によって具体的に得てきたものが実感できていないからだといえる。貨幣経済の発達した社会では、人間が現実をコントロールするというのは「金銭を得て使う」という行為であり、また、その行為を他者より豊かにするために抽象的なことがらを扱えるように習熟する（→就職する）ことも、現実のコントロール感覚につながるはずだ。しかし、『新卒無業』（2002）によると、就職状況は、1989年の「超売り手市場」から1995年の「就職超氷河期」まで6年の違いしかない。抽象的なことがらの習熟に同じ努力をしたとしても、それが、現実感覚が麻痺するほどの待遇にあうか報われないかはわからない。

ところで、モラトリアム期の特徴として、準備期間たる学校期間の延長ということがあった。現在の学校および受験教育とは、抽象的な記号の習熟にそのほとんどが当てられている。ポスト青年期の若者たちが、現在の不安とその心理的解決を歌おうとすれば、そのテーマが現実の具体性に結びつかないままに、（準備中たる）他者一般を励ますしかないといえる。そういう意味では、かれらは準備期間に忠実な優等生であり、抽象的な場面を仮定し鼓舞することに腐心している。

4.4 空回りするエネルギー

さて、このような「努力することが重視される準備の世界」と「努力しても報われない現実世界」の溝を埋めるために、前者の立場から、後者の報われなさを扱おうとすると、ある種の宗教的な悟りへ向かう努力に近くなってしまふ。実際、1995年のオウム真理教事件には、教祖が「さあ修業するぞ修業するぞ」と繰り返すテープなど、励まし歌の延長ととれる傾向がある。一方で、後

者の立場から、前者の世界の努力が空回りするさまを歌った一連の曲もある。

たとえば、空転する「夢＝理想」類型を歌う尾崎豊が「裏切られる」という言葉にこだわるのは印象的だ。尾崎は生涯の71曲中、7曲で「裏切り」という言葉を使用しているが、そのうちの6曲は20代に入ってから、1988年以降に集中している。

尾崎よりやや前の世代（1952年生まれ）の浜田省吾は、「砂浜で戯れてる焼けた肌の女の子たち／俺は修理車を工場へ運んで渋滞の中／TVじゃこの国 豊かだと悩んでる／だけど俺の暮らしは何も変わらない」「意味もなく年老いてく／報われず 裏切られ／何ひとつ誇りを持ってないまま」（『八月の歌』1986）と歌っている。尾崎のあとの世代である Mr. Children には、「晩飯も社内で一人 インスタントフード食べてんだ／ガンバリ屋さん 報われないけど」（『everybody goes』）という歌詞がある。尾崎同様に（自死に近い）急死で何万という若者を葬儀に参列させた hide にも、「幻覚に踊る身体は 心とは裏腹のパントマイム／ほころびてる傷を埋めるのは／僕が僕で在り続けるため」「まだ君の声は届かない」（『TELL ME』1994）といった歌詞がある。

浜田は、バブル期における TV での「豊かな日本」イメージと、(近代的自我として) 倫理的成熟もできない冴えない自分の生活との間のへだたりを歌う。尾崎の場合、「こんな仕事は早く終わらせてしまいたい まるで僕を殺すために働くようだ」「誰も知らない僕がいる」（『太陽の瞳』1992）といったように、完全主義や仕事が現実的な他者との関係に結びつかず、観念的に自分を追いつめる方向にしか作用しない痛みを歌う。Mr. Children には、「知識と教養と名刺を武器に／あなたが支える明日の日本」というように、「24時間戦えますか?」という栄養ドリンク剤の CM

的な社内風景を暗示しながら、その就労時間はいくらか増やしても人間を幸せにしていけないというアイロニーがある。hide は、自分はただ幻覚のなかにあつて傷を埋めるために動いているだけであり、誰かの現実的な「心」「呼びかけ」が必要だが届いていない、という閉塞感を歌う。この四者共通のテーマは、「表」にあるエロスイメージ・エネルギーの強さ（「焼けた肌の女の子たち」「渋滞（を急ぐ）」「ガンバリ屋」「幻覚に踊る」）と、そこから「裏」で切られて、取り残されて苛立っている人間の心象である。

浜田の曲では、さらに、「俺たちが組み立てた車が／アジアのどこかの街角で焼かれるニュースをみた」と歌われる。苦勞してつくって運搬している車は、違う国の人間を不幸にしている。つまり、ガンバればガンバるほどマイナス、もしくはゼロ（幻覚）なのである。こうして「ビジュアル系バンド」などが使用する「夢＝虚構＝幻覚」定型が成立する。それは「夢＝理想」のように未来へ向かうのではなく、演歌的「夢＝虚構」のように過去の共同体的記憶を参照するのでもなく、ただ「現在」をファンタジーを消費しつつ生きるような現実感覚（の希薄さ）に結びつく。

歌詞についていえば、浜田と hide を較べてみても、どんどん抽象度を増しているのがわかるだろう。hide でいえば、「幻覚に踊る身体」「ほころびてる傷」などと痛みを表現しても、それが具体的にどこから生じているのかは語られることがない。また、浜田が歌った「アジアのどこかの街角」等の世界経済的な問題も、日本の流行歌にはほとんど登場しなくなる。

4.5 焦燥する「ひきこもりシステム」の歌

ところで、斉藤環『社会的ひきこもり』（1998）がその基礎にしているアイデアは、オートポイエシス理論を参考にした「ひきこもりシステム」と

いうものである。これと、前述してきた「空転し焦燥する歌」の構造は通底しているようにみえる。

通常、「個人」「家族」「社会」というふうに、「個人」を包み込むかたちで三重の領域があって、それぞれの接点があって、そこでの相互的なコミュニケーションによって「健全なシステム」は進行していく。たとえば、そこで個人の「失敗」があったとして、会社からの叱責があったり家族からの慰めがあったり、会話のなかでその「失敗」は解消され次の日につながっていく。一方の「ひきこもりシステム」とは、そうした接点を失い、三つの領域が相互にコミュニケーションできなくなったとき、「個人」の焦燥感、家族の不安、社会の圧力といったものが悪循環し、ますます葛藤（ひきこもり傾向）が深まる、というモデルである。すなわち、まず、社会（「世間」）は家族・個人に暗黙のプレッシャーを与える。家族は問題を内側で解決するために、（出ていくべき）社会と切れたままで個人を励ます。個人は、励まされてプレッシャーを感じるためにますますひきこもり、社会は「これはいけない」とさらに叱咤激励を与える・・・

それによって治療・相談機関への脱出口が閉ざされる、というのが精神科医としての齊藤の論点であるが、流行歌論の立場からは、特にバブル崩壊以後の具体性を失った（＝現実とコミュニケーションできなくなった）「夢＝理想」や応援歌は、この「ひきこもりシステム」における圧迫を思わせる。励ます現実的（社会的）な方向性をもてないかぎり、家族や社会からの励ましは、個人の観念性から現実世界へとびたつためのハードルを高くし、焦燥を深めさせる作用をもってしまう。

励まし歌と登場時期を同じくして、その励まし歌が追いつめるようなかたちで、こうした「焦燥の歌」が生まれていた。文字通りそれは、励まし

歌の「影」である。そしてその影は、バブル崩壊後何年かして、若者の就職難がいわれるようになった頃、その濃さを増すようになる。

独りきり情熱を振り回す バッティングセンター／僕は夢見たあげく彷徨って／空振りしては骨折って リハビリしてんだ／散らかってる点を拾い集めて／真直ぐな線で結ぶ／限りあるまたとない永遠を探して／最短距離で駆け抜けるよ 光の射す方へ

（Mr. Children『光の射す方へ』1999）

途切れた黒い夢に今日もまどわされる 傷だらけの声で笑った／うるさく走り過ぎる車の音数え 眠れなくなるのを願った／真夜中 そう新しい夢見たいのに 冷たく ただ狙い撃つ雨 OH／TOKYO 狂った街 いつからだろう失くした PASSION／歯車に成り下がるより 墮落するより 脱走したい 隔離されたここから （SADS『TOKYO』1999）

これらの曲は、その空転性・現実感覚喪失・情熱が焦点を失い焦燥感に追われていること・抽象的な脱出願望、といった点において、「ひきこもりシステム」の象徴的な例である。「空振り」すればするほど「骨折って」「リハビリ」にエネルギーを費やし、かれはその時間を取り戻すためにまた「空振り」に励むだろう。こういう曲は男性アーティストに多いが、「隔離されたここ」から「光の射す方」へ向かうといっても、このように昆虫レベルの抽象的感覚性でしか社会を扱っていない場合、現実生活のなかではむしろ閉塞感を強めることになるだろう。

5 結論～ポスト青年期ソングの現在

以上、量的分析を通じて得られた歌詞の定型の変化への知見（吉岡2002）をもとに、「ポスト青

年期」的葛藤を表現する流行歌について、「励まし歌」というキーワードから、注目すべき歌詞を分析してきた。

初期の励まし歌は、70年前後にポスト青年期の登場と連動してあらわれたものだが、井上陽水や吉田拓郎にみられるように、不確かな「夢＝理想」を定型にしなければならない新しい事態への、屈折した自己への励ましといった意識がある。一方で、アメリカへの物質的な憧れを背景に「ヒーロー」へ向かう励ましも登場する。

80年代には主に後者の要素が強まり、勇ましく華やかな励まし歌が増える。しかし、こうした「夢＝理想」は、実現すべき現実像を見失っていく。その理由としては、大きなイデオロギーの終焉やメディア環境の変化、産業構造の変化、家族構成の変化等、さまざまなものが考えられるが、日本の流行歌の変化については、時期的にいつても、(近代的自我が確立されないままに訪れた)消費社会、とりわけバブル経済の影響と考えるのがもっとも説得力がある。歌のなかで、尾崎豊のように「金のためじゃなく夢に賭けてみるさ」といったかたちで「金」と「夢」を切り離す考え方にせよ、物質的な豊かさのイメージと「夢」を重ねる考え方にせよ、一方は抽象化された〈大人〉像に向けて自他を励ますほかなくなり、また一方は、世界経済の圧倒的な動きに精神論で対応するほかなくなっていた。

その後若者が安定した就職先を失いはじめたとき、そうした状況を、「夢＝理想」定型の濫用や、自他を励ます歌などで乗り切ろうとしたのが90年代である。こうして、2～30年の間に、励まし歌は、若者から現実の分析やコントロール感覚を奪うメディアとして機能するようになった。アイデンティティ形成に深くかかわるメディアになりながら、それを迷路に導く機能をもってしまう。自覚的な作り手たちは、空回りの焦燥を表現

したり、急死・バンド解散・活動休止といった自壊作用をおこしてきた。

ただし、流行歌の世界も絶えず再編成されているのであり、本稿での結論や指摘は、もはや一時代前の作品群や若者にあてはまるものといえる。ここから先は、今後の分析課題として、現在の新しい動きを概観だけしておく。

もっとも大きな変化は女性歌手である。〈妻〉の立場からの励まし歌は急速に力を失い、結婚相手を経済面で選別する視点が消える。その分、理想のパートナーは抽象化され、精神の問題になる。いわゆる女性の「個人化」のプロセスにかかわる問題である。大黒摩季は95年前後にそうした葛藤を表現した。2000年前後にもっとも売れた宇多田ヒカル・浜崎あゆみの歌詞を特徴づけるのは、まず女性自身が作詞しているということもあるが、自分の内面にひたすら問いかける姿勢である。筆者はかつて宇多田の歌詞を「半独り言」の応援歌として論じている(吉岡 2001)。

「ひきこもりシステム」を表現していた Mr. Children も、新しい展開をみせている。

光っていて大きくて透けてる三色の虹に ピントが上手く合わずに やがて虹は消えた／胸を揺さぶる憧れや理想は やっと手にした瞬間に その姿消すんだ／アジアの極東で 僕がかけられてた魔法は 誰かが見破ってしまったトリックに解け出した／叶いもしない夢を見るのは もう止めにすることにしたんだから 今度はこの冴えない現実を 夢みたいに塗り替えればいいさ (『蘇生』2002)

この歌詞は「ポスト青年期的」に抽象的ではあるが、「虹のような夢＝理想」という、主に桑田佳祐がバブル期に流行させた定型(吉岡 2001)を、「現実」という言葉と接触させている。桑田

自身も、「夢が終わり目覚めるとき 深い闇に夜明けがくる ほんとは見た目以上打たれ強い僕がいる」「人は涙みせずに大人になれない」「ガラスのような恋だとは気づいてる」という『TSU-NAMI』を2000年にヒットさせた。「叶いもしな

い夢」を流行歌の定型にせざるをえなかった日本型ポスト青年期における、現実意識・生活意識の隠蔽が、表現（＝テキスト生成）のレヴェルでは気づかれはじめているのだろう。

〔参考文献・資料〕

- Aries, Philippe. 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime*, Paris=1980 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房。
- Ulich Beck, Elizabeth Beck-Gernsheim 2001 *Individualization: Institutionalized Individualism and Its Social and Political Consequences*, SAGE Publications.
- Erikson, Erik H. 1968 *Identity: Youth and Crisis*, W. W. Norton & Company, Inc.
- Jones, Gill., Wallace, Claire. 1992 *Youth, Family and Citizenship*, Open University Press.=2002 宮本みち子監訳・鈴木宏訳『第2版若者はなぜ大人になれないのか 家族・国家・シティズンシップ』新評論。
- Keniston, Kenneth. 1968 *Young Radicals: Notes on Committed Youth*, Harcourt, Brace&World Inc., New York.=1973 庄司興吉・庄司洋子訳『ヤング・ラディカルズ』みすず書房。
- Levinson, Daniel J. 1978 *The Seasons of a Man's Life*, The Sterling Lord Agency, Inc., New York.=1992 南博訳『ライフサイクルの心理学』講談社。
- 青木 保 [1990] 1999『「日本文化論」の変容戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論社。
- 石田佐恵子 1998『有名性という文化装置』勁草書房。
- 大久保幸夫 2002『新卒無業。』東洋経済新報社。
- 大澤真幸 1996『虚構の時代の果て』筑摩書房。
2005『現実の向こう』春秋社。
- 小川博司 1995「青年の音楽生活」高橋勇悦監修『都市青年の意識と行動 若者たちの東京・神戸 90's』恒星社厚生閣。
1998「ポピュラー音楽へのアプローチ」井上 俊編『現代文化を学ぶ人のために』世界思想社。
- 小此木啓吾 [1977] 1981『モラトリアム人間の時代』中央公論社。
- 笠原 嘉 1984『アパシー・シンドローム』岩波書店。
- 金子 勝・大澤真幸 2002『見たくない思想的現実を見る』岩波書店。
- 香山リカ 1999『〈じぶん〉を愛するということ 私探しと自己愛』講談社。
- 北川純子編 1999『鳴り響く性 日本のポピュラー音楽とジェンダー』勁草書房。
- 玄田有史・曲沼美恵 2004『ニート フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬社。
- 古茂田信男他編『新版日本流行歌史上中下』社会思想社。
- 齊藤 環 1998『社会的ひきこもり 終わらない思春期』PHP 研究所。
- 齊藤真緒 1999「現代における母子関係の意味変容—ウルリッヒ・ベックの『個人化』論を手がかりとして—」『立命館産業社会論集 第35巻第1号』立命館大学産業社会学会。
2000「親性の『個人化』—家族の分析視角としての『個人化』論の可能性—」『立命館産業社会論集 第36巻第3号』立命館大学産業社会学会。
- 桜井哲夫 1998『〈自己責任〉とは何か』講談社。
- 角 知行 2003『Jポップにみるジェンダー表現の変容—教養講義(4)の授業とレポートから』『総合教育研究センター紀要 創刊号』天理大学人間学部。
- 舌津智之 2002『どうにもとまらない歌謡曲 七〇年代のジェンダー』晶文社。
- 芹沢俊介 2002『引きこもるという情熱』春秋社。
- 竹田青嗣 [1983] 1995『〈在日〉という根拠』筑摩書房。
- 鶴見俊輔 [1960] 1999『限界芸術論』筑摩書房。

- 富永健一 1996『近代化の理論近代化における西洋と東洋』講談社。
成美堂出版編 2000『J-POP ヒットソングス』成美堂出版。
庭田茂吉 2004「ウルリヒ・ベックを知ったからには」『同志社大学ヒューマン・セキュリティ研究センター年報第1号』萌書房。
原田 達 1998「社会意識の現在」池井 望・仲村祥一編『社会意識論を学ぶ人のために』世界思想社。
藤井淑慎 2000「歌謡曲の中の〈故郷〉」内田隆三他『故郷の喪失と再生』青弓社。
二神能基 2005『希望のニート 現場からのメッセージ』東洋経済。
見田宗介 [1967] 1978『近代日本の心情の歴史流行歌の社会心理史』講談社。
1995『現代日本の感覚と思想』講談社。
1996『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来—』岩波書店。
南田勝也 2001『ロックミュージックの社会学』青弓社。
三沢謙一編 1989『現代人のライフコース』ミネルヴァ書房。
宮台真司・石原英樹・大塚明子 1993『サブカルチャー神話解体』バルコ出版。
宮台真司・藤原帰一・金子 勝・A. デウィット 2004『不安の正体!』筑摩書房。
宮本みち子・山田昌弘・岩上真珠 1997『未婚化社会の親子関係—お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣。
宮本みち子 2002『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社。
2004『ポスト青年期と親子戦略—大人になる意味と形の変容』勁草書房。
宮本みち子他 2004『イギリス・スウェーデン・イタリアの若者の実態と社会政策の展開—労働市場・教育制度・家族・結婚の動向を中心として—』千葉大学教育学部。
村瀬 学 2002『なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか』春秋社。
山田昌弘 1994『近代家族のゆくえ』新曜社。
1999 a『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房。
1999 b『家族のリストラクチュアリング』新曜社。
2001『家族というリスク』頸草書房。
2004 a『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房。
2004 b『パラサイト社会のゆくえ—データで読み解く日本の家族』筑摩書房。
吉岡威史 2001『「虚構の時代」の大人像—歌謡曲における『夢』使用法の諸類型をとおして—』『同志社社会学研究 第5号』同志社社会学研究会。
2002「戦後歌謡の定型にみる『現実』感覚の変遷—『虚構の時代』論の再検討—」『同志社社会学研究 第6号』同志社社会学研究会。
吉本隆明 [1984] 1988『マス・イメージ論』福武書店。
日本音楽教育センター『精選盤 昭和の流行歌 歌詞集』。
(財)京都市ユースサービス協会 2004『若者と仕事—ユース・シンポジウム 2004 報告書』。
(財)京都市ユースサービス協会 2005『若者の性と生を考える—10代のセクシャルヘルス(性と健康)に関わる青少年支援者人材養成事業報告書』。